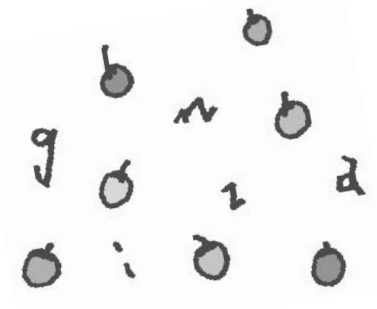
銀座の新しき石と古き石

西本昌司（にしもとしょうじ）
（街角地質学者、愛知大学教授）



銀座の魅力は石だ。そういうと首を傾（かし）げられてしまうだろうか。石を見るために、銀座をぶらぶら歩いている人間なんて、私くらいかもしれない。しかし、銀座のメインストリートの歩道は石畳になっているし、ビルの外壁にはきれいに磨き上げられた石材が張られている。銀座ほどバラエティに富んだ石材に出合える場所はないだろう。

ある日、アルマーニのウインドウで、しばし動けなくなってしまった。優雅な流れ模様が見えるパキスタン産「オニックスマーブル」と、青い筋が入ったブラジル産「アズールマカウバ」と思われる豪華な石材が使われていることに気付いてしまったのである。これらの石材をじっくり観察するために入店したいという衝動を抑えるのが大変なほどであった。

最近も、行列ができていたティファニー店内をふと見て、エスカレーター横の壁に鮮やかな緑色の石材が使われていることに気付き、足を止めてしまった。外から覗（のぞ）いただけなので、はっきりしないが、おそらくアマゾナイトを含むブラジル産の御影石だろう。いずれにしても、初めて見る石材であることは間違いない。やはり、あの石材をじっくり観察するために入店したい！　という衝動が湧き起こってしまった。

しかし、こういう時、小心者の私は、自分の石材同定が間違いないか確かめるためだけに高級ブランド店に入店する勇気などなく、ただただ「おぉー！　すげー、たぶん○○だな」とつぶやいているだけである。

やむを得ず、気兼ねなく石材観察できるビルの外壁を見ながらぶらぶら歩こうと、通りの向こう側を見て

いたらすぐに気になる石材が目に入ってきた。二丁目のゼニア銀座ビル（二〇一四年竣工）の外壁に使われていた細かい縞模様のある黒っぽい石材である。しばらく謎の石材だったのだが、後に、ひょんなことから知ることとなった。どうやら、スイス産の変成岩で、石材としては産地の地名から「バルス」と呼ばれているらしい。その縞模様は、岩石が地下深部で大きな圧力を受けてずらされながら（剪断応力を受けながら）延ばされてできたものである。アルプス山脈がうまれる時の記録が刻まれた石と銀座で出合えるなんて、ワクワクするではないか。

世界中の石材が使われているビルもある。五丁目の「座ＳＴＯＮＥ」（二〇一三年竣工）だ。カナダ、イタリア、南アフリカ、中国などから輸入された二十四種類の石材が使われているのだから、これはもう石材天国である。しかも、ビルの下の方は割ったままの表面を見せた割肌仕上げで、上の方に行くと磨かれた本研磨仕上げにするという凝ったデザインとなっており、石材の表面仕上げの違いまで観察できてしまうのだからたまらない。

こんなふうに、見たことがない珍しい石材に遭遇し、唸らせてもらえるのだから、銀座の石の魅力は半端ない。しかし、銀座の真骨頂は、古いものが守られていることにある。

ある日、親しい仲間から「改装された松屋銀座に行ったら、階段に珍しい大理石が使われていたよ」と聞いて見に行ってみた。真新しいガラス張りの外装だったから、定番のイタリア産の白い大理石が使われているのではないかと想像していたのだが、見事に裏切られた。その大理石は、紛れもなく岐阜県産の「紅更紗」という銘柄。高度経済成長期に造られたものだと思う。濃淡混ざったグレーの石灰岩が砕けて積み上げられたような独特な模様をしていて、見た目の派手さはないがダイナミックな地殻変動を感じさせてくれる。そんな〝往年の銘石〟で造られた階段が、大規模な改修工事によっても姿を消すことなく、ちゃんと保存されていたのだから感激である。この大理石が大規模に使われている場所はもはや松屋銀座くらいだろう。貴重な国産大理石の階段を保存しようとした人がいたのだからありがたい。古きものを守りつつ、新しいものを創り出す。それが、銀座ら

しいところなのではないか。そう感じさせてくれる石との出合いだった。

古きものといえば、シンボリックな建築でもある和光本館（一九三二年竣工）を忘れてはならない。なにしろ、拙著の取材のため、私が外壁に張り付いたところをY新聞社のカメラマンに撮影していただいた記念すべき場所（笑）。その外壁に使われているのは、岡山県産「万成石（まんなり）」という淡いピンクの石材である。

今でこそ、レトロで落ち着いた雰囲気に見える和光だが、それは、周囲に派手なサインが増えて、赤や濃いピンクの石材もありふれてしまったからではないだろうか。建設当時、東京で使われていた石材といえば、江戸城石垣に使われていた黒っぽい小松石か、白っぽい御影石が少しある程度であり、ピンク色の御影石は目新しくインパクトがあったはずである。現在、向かい側の三越も、海外産とはいえ、ピンクの御影石を使っているのだから、影響を与えたのかもしれない。つまり、和光の外壁の石材も、かつては新しき流行の最先端だったわけで、それが今も大切に守られているわけである。

流行の発信地としてオリジナリティを追求してきた銀座では、店舗自体も新しいデザインとするため、石材でもオリジナリティを追求してきたのであろう。戦前から現代まで、それぞれの時代で、珍しい石材を使いながら魅力的な店にしようと競争してきたのではないか。その一方で、古き良きものは残してきた。

そのおかげで、世界中から持ち込まれたバラエティに富んだ石材が、銀座の街に蓄積していった。結果的に、銀座は、新旧取り揃（そろ）えた石材の〝博物館〟となり、そうした様々な石材によって街の雰囲気が醸成されているように感じられる。銀座を飾ってきた石には、地球の歴史とともに、銀座の街の歴史も刻まれているのである。

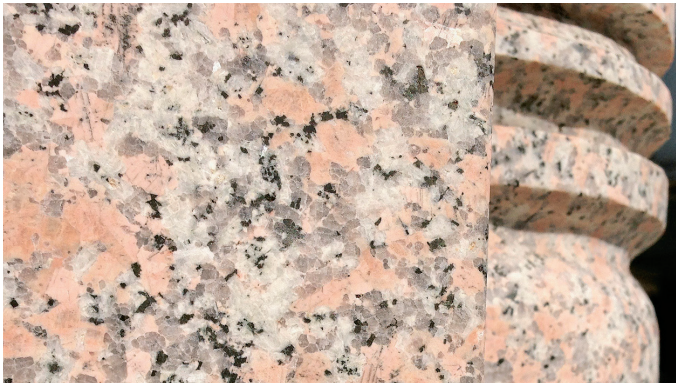
トラヤ帽子店
東京都中央区銀座 2-6-5 〒104-0061
TEL.03-3535-5201
http://www.ginza-toraya.com/

「石」を探して街歩き

監修・写真提供　西本昌司(N)
撮影　寺門栄治(T)

〝街角地質学者〟西本氏のエッセイ(P22～)と合わせてお楽しみください。

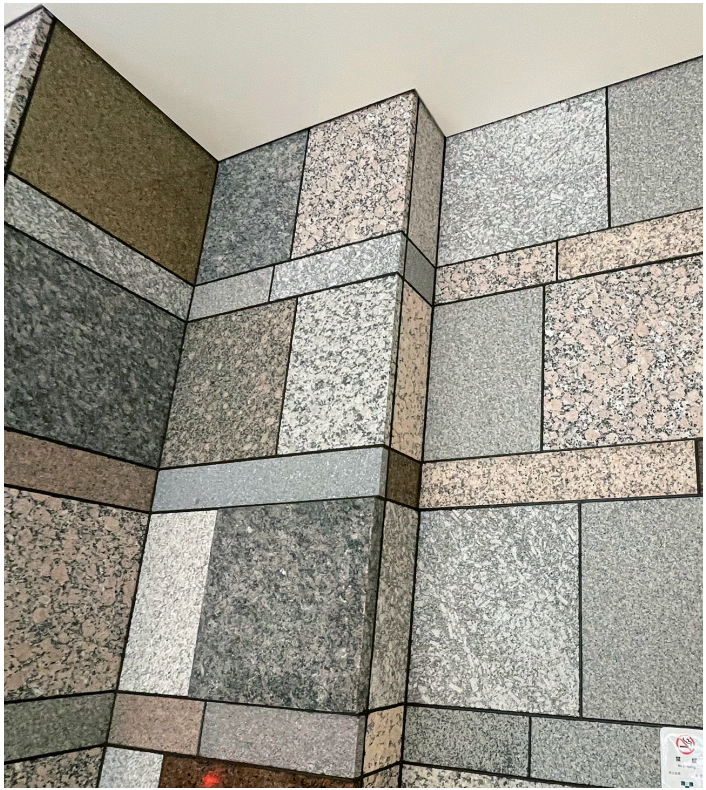
銀座通りの歩道
1～8丁目の歩道の敷石には、新旧の石が織りまざる。
一部には、都電の軌道に使われていた石の再利用も。(T)



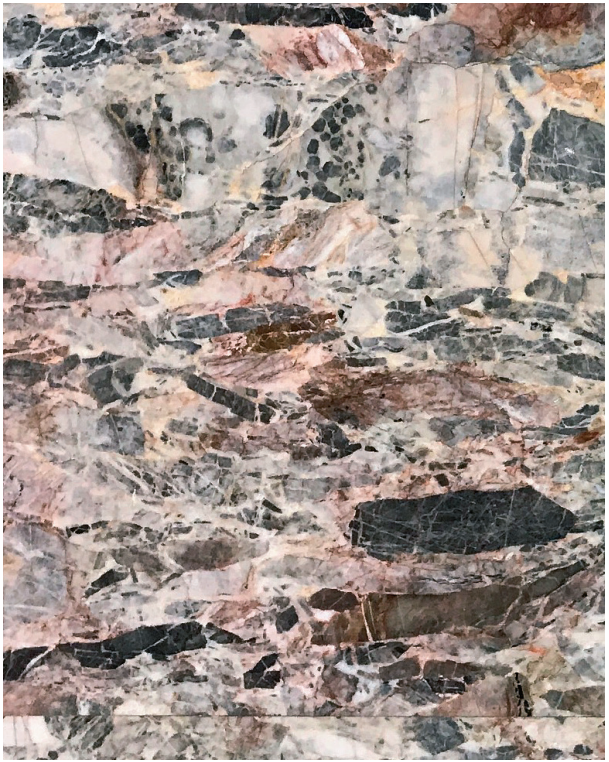
▲ 外壁低層部の淡いピンクの「万成石（まんなりいし）」（N）

▲ 木目のような大理石「スタラティーテ」のエレベーターホール（T）

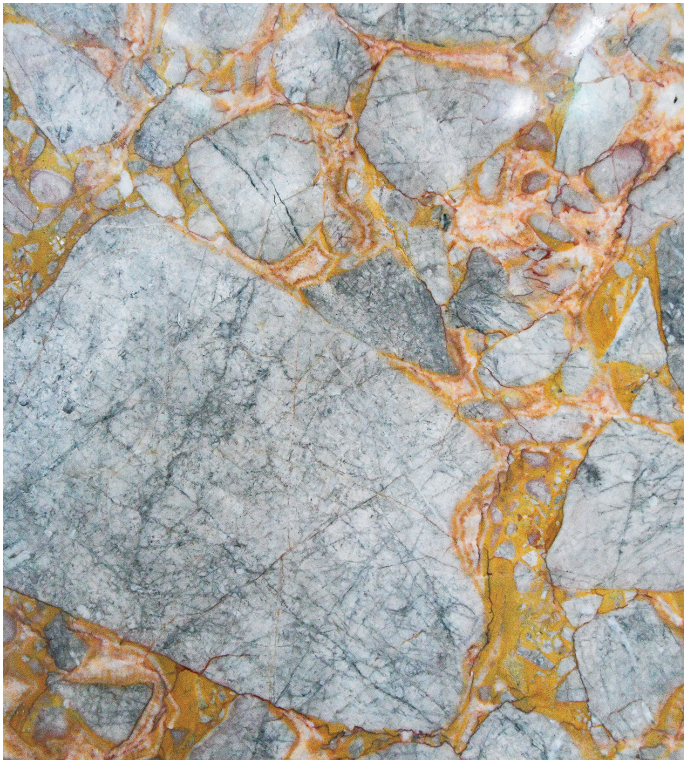
和光本館
1932年竣工。外壁低層部に岡山県産の「万成石」、内部にイタリア産の大理石を多用した華やかな造り。（N）



座 STONE（ねんりん家 銀座本店）
2013年に竣工。各国から輸入された多様な石材が外壁を彩る。上下で仕上げが異なるデザインも見どころ。(N)



松屋銀座　本館
階段の壁面に岐阜県産の「紅更紗（べにさらさ）」を使用。このように、砕いた石をまぜたような独特な模様の大理石を「更紗」と呼ぶことがある。（N）



東京メトロ日比谷線 東銀座駅ホーム
柱に使われている更紗模様の「錦紋黄（きんもんき）」と呼ばれる国産大理石。地下鉄には各所に大理石が使われていたが、改修時に撤去されたものも多い。(T)

銀座駅コンコース 地下鉄の父・早川徳次像
早川徳次（のりつぐ）像の背後を飾る柱は、「ヴェール・デストゥール」。旧東宮御所の調度品にも使われた、フランス産の大理石。（T）
西本氏『東京「街角」地質学』では、ほかにも多くの街中の石を紹介。